
CLOSE GATE ～扉を鎖す者たち～

フヌケ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

C L O S E G A T E 扉を鎖す者たち

【Nコード】

N 5 4 2 7 H

【作者名】

フヌケ

【あらすじ】

あの夜、終電に飛び乗った日向シンヤを襲った出来事は、この世の終わりを告げる序章にしかすぎなかった。あの世とこの世を結ぶ扉が破壊された時、死者と生者との闘いが始まる。

？

日向シンヤは、この終電に慌てて飛び乗ったことを後悔していた。いつもは深夜のバイトが終わる時間は、終電には確実に過ぎている。しかし今日は、たまたま先輩の愚痴に付き合わされることなく、すんなり職場を出てしまったせいで奇跡的に間に合ってしまった。

後悔の理由は、目の前に酔い潰れる中年のサラリーマンがいたことだ。今にも胃袋のものを全て爆発させてしまうのではないかという恐怖と、変に絡まれたらどうしようという不安で、バイトでくたくたのはずの身体は、伸ばされた針金のようにぴんとしていた。中年は叫んだり、窓を叩いたり、手がつけられない子どものようだ。けれど、この場から動き出せないで固まっている自分も、叱られた子どものようなだった。

車両を変えよう。

そう、自分に言い聞かせ立ち上がった日向だったが、サラリーマンが床に倒れたせいで足が止まってしまった。

「あの…大丈夫ですか？」

こういう時、チキンのくせに声をかけてしまう自分が、つくづく嫌になる。

「うお…え…」

勘弁してくれよ。

言葉にならない代わりに、眉間に皺が寄ってしまう。

「ぎいえ…ええ…ぐお」

こういう大人には絶対になりたくないと思った瞬間、サラリーマンの口から出てきたものに、日向は腰を抜かした。

液体？

異物？

何だ、この異臭は…。

倒れたサラリーマンの身体を引き裂き、奇声を発しながら現れたものが動き出したと確認できた瞬間、日向は異様な光景を目の当たりにしたせいか、その場に吐いてしまった。

「ばあああ!!!」

サラリーマンの身体は、もはや人間とは思えないほど、異臭を放つ液体と血でぐちゃぐちゃになっていた。

夢？

であってほしい。

「解放されたああ!」

動き出したその物体は、甲高い声で笑い出した。

よく見れば、自分と同じように手足があり、目も鼻も口もある。けれど、耳は剣のように細長く、口からは長い牙が剥き出しになっていた。

「お前さんツイてるぜ。解放の瞬間ってのは、なかなか見られない……」

動け、足。

叫べ。

「……あ……」

絞り出した声が、あまりにも情けなかったせいか、物体はさらに笑った。

「ひゃっはは!人間だから仕方ない。この場に居合わせたのが運のツキよ……」

手から伸びた長い爪が、真っ直ぐ日向に向く。

死ぬ。という状況に陥ったことがない彼にも、ここで自分の人生が終わってしまうと理解できた。

まさか、こんなに理解できない死に方をするなんて……。

「バイバイ」

得体の知れない奴に殺されるなんて……。

納得いかないよ。

「…ギヤア!!」

日向か目を閉じた時だった。隣の車両から伸びてきた何かが、物体の身体を突き刺した。

「隣の車両だったか…やっぱり、私の勘はいつも外れる」

今日は理解できないことだらけだ。

終電に間に合ってしまったことも、酔っ払いのいる車両から逃げ出せなかった自分も、その酔っ払いを引き裂いて現れた物体も、殺されないですんだこの状況も、何一つ理解できない。

けれども、一つだけ理解できたことがある。

「よう、日向！夜遊びの帰りか？」

そこに現れたのは、クラスメートの比上キヨリだった。

キーパーソン？

日向の両親は、彼が十歳の時に亡くなった。当日は、事故で死んだと聞かされていたが、二人は自殺したのだと高校生になって親戚から告げられた。

何故、二人が死を選んだのか、誰も知らない。仲がよく、仕事も順調だったはず。何より、日向自身、そう聞かされても納得できなかった。

自分を置いて、両親はあの世へ逝ってしまった。

怨んでないと言ったら、嘘だ。

今の日向は、高校生活よりも、卒業したら一人暮らしをする資金集めの為、バイト三昧。だから、クラスに友達もいなければ、全員の名前すら分らない状態だ。

「日向い！屋上にいたんか！」

ただし、こいつは別だ。

赤毛の長髪に、口元にピアス。嫌でも視界に入ってきて、どこからともなく噂が聞こえる。

比上はヤバイ。

ただでさえ気弱な日向にとって比上キヨリは、最も近づきたくない存在だった。

「昨日は…その…助けてくれてありがとう」

「ちゃんと眠れたか？」

ピアスが刺さった痛々しい口元が笑う。

「いや、全然」

「だろうな」さらに笑う。

比上は、ゆつくりと日向の隣に座る。屋上で、彼女と二人きりでいるなんて、昨夜の光景同様、何だか奇妙だった。

「現実だったんだよね？」

恐る恐る尋ねる日向の目に、頷く比上が映った。

なあんて！本当は全部ドッキリでしたあ！とは、言ってくれなさそうな、真剣な目つきだった。

「お前はキーパーソンだから、いつか話そうと思ってた」

「キーパーソン？」

比上が、日向が首元を指差す。

「これ？」

それは、死んだ父親がいつも身につけていた錆びた鍵だった。身体は無残な姿になってしまったが、この鍵だけは曲がることなく残っていたらしい。

「1999年7の月

空から恐怖の大王が舞い降りてアングルモアの大王を甦らせる。知ってるか？」

「ああ、ノストラダムスだろ？」

「そう。16世紀、フランスに生まれた預言者ミシェル・ノストラダムスは、世界が終わると予言した。でも、その予言は外れたとされ、世界はこうして平和に保たれている」

中学生の時、女子たちがうるさく騒いでいたことを思い出した。

「この予言は、外れちゃいない。1999年7の月、あの世とこの世を繋ぐ扉が、大魔王の力によって破壊された。そのせいで、魔物と化した死者がこの世に舞い降りた」

春なのに、やけに冷たい風が吹いた。

「魔物は、生者の血肉を喰らい生者に成り済まし、この世に侵入して大魔神の元、侵略を企んでいる」

想像力豊かな奴だなと思う反面、昨日の光景が蘇る。

サラリーマンの身体から笑いながら現れた物体は、確実にこの世

には存在しない生き物だ。

「世界の終焉。それを阻止するために、破壊された扉を見つけ、鍵をかけるのがキーパーソンの使命なわけ」

比上も、首から下げた銀色の細い鍵を見せた。

「お前ら、授業始まるぞっ」

うるさい生活指導の中川が現れなかったら、この子どもじみた話を信じるころだった。

「今行きます」

日向は慌てて立ち上がったが、比上は彼の腕を掴んだ。

「な、何だよ」

不覚にも、心臓が高鳴った。

「行くな」

比上は続けて言う。

「死ぬぞ」

解錠？

生活指導の中川は、全校生徒から嫌われた教師だった。がえ蛙のような顔と、砂漠化した髪型が、彼の評価を一層下げていたが、なによりみんなが彼を嫌う理由は、融通の効かないその性格だった。

校則違反は即呼び出し、携帯、ピアス、化粧品、漫画、授業に係ないものが見つければ、一ヶ月は返ってこなかった。違反をしているのはこちら側なので、反論する余地はないが、一方的且、校則違反を見つけることに喜びを感じている態度には、みんな中指を立てていた。

だから、比上が言った

「死ぬぞ」の意味は、校則を片っ端から破っている彼女が、中川に捕まるという意味だと思った。

「何だよ。授業始まるから、俺は行くぞ」

こんな奴と一緒にいたら、こっちまで同類と思われるしまう。

「動くな日向。下がれ」

身体を押される。

ふざけんなど言えなかったのは、彼女の殺気を感じたからだ。

「比上、お前は残れ。その髪とピアスは校則違反だ」

ざまあみろ。

「解放できなくて、うずうずしてるみたいだな。口元に歪みが生じてる」

そう言つと、比上は持っていた鍵を握りしめた。

「解錠っ」

比上が叫んだ瞬間、手の平サイズだった鍵が杖のように伸びる。

「貴様：キー：パーソンかつ」

中川の目が、不自然に吊り上がる。

それだけじゃない。手足は有り得ない方に曲がりだし、頭は悲痛な音を立てて回り出した。

何かが、彼の身体から無理矢理出ようとしていた。

「ぐう…ぎいぐ…ばああつつ」

昨日と同じだ。

中川の全身から、赤みがかった液体が流れ出し、異臭が襲う。先程まで、普通に立っていたはずの教師は、その形さえ分からなくなっていた。

「せ…先生…」

洩れた声が言葉にはなっていたが、日向自身、何を言ったのかは覚えていない。ただ、一人ぼっちになってから今日まで、何事もなく平和だった生活が、崩れていく瞬間を忘れることはないだろう。

「あれが、生者の血肉を喰らった魔物だ…」

「何で…先生が…」

「先生だろうが、肉親だろうが、魔物に身体を乗っ取られたら死ぬ」多くの魔物を見てきたせいなのか、比上の口調はとても冷静だ。

「ばあつははっあ！解放されたあああ」

昨日まで、いや、ついさっきまで、人間だったはずなのに。目の前にいるのは

何だ？

「あれは初段。昨日のヤツと同じ。でも、油断すると…」

飛び上がった魔物が、鋭い爪を比上に振り下ろす。素早く鍵でガードするが、ぶつかり合った衝撃で、火花が散った。

「あの世逝き」

うつすらと笑みを浮かべる比上にすら、不気味さを感じる。

「日向、鍵を持って解錠と叫べっ！あんたなら、覚醒できるっ」

「何言ってるんだよ！無理に決まってるんだろ」

俺はお前とは違う。

真っ当な人間だ。

魔物の力に、比上が押される。鍵を振り上げた瞬間、勢いよく爪

が剥がれた。

コンクリートの地面に、魔物の爪が突き刺さる。

「ひいっ！……貴様ああ……！」

自慢の爪を失った怒りからか、魔物の動きは速さを増す。

「邪魔だっ！逃げろっ」

解錠しろと言ったり、逃げろと言ったり、彼女を理解できない。

ただ、殺気と殺気がぶつかり合う空気を吸ったせいか、日向は身体が上手く動かないでいた。

「初段のくせに……生者の中にいた時間が長いせいか、厄介だな」

反対に、比上はどこまでも落ち着いている。いや、それどころか、この闘いを楽しんでいるようにも見えた。

「……人間は、大事なもんを奪われるのが大嫌いなんだろ？……ぢあ
あ、こっちの身体を、いただきまああすっ」

魔物が一瞬にして、日向の前に移動する。日向が、魔物が前に来た
と理解できた時は、すでに魔物は彼に自慢の爪を振り下ろしてい
た。

「日向いつっ！……！」

こんなことが現実？

俺は認めないぞっ！

でも、わけも分からず死ぬなんて……

そんなの、御免だっ……！！

「……か、解錠っ！……！」

つぶった目を恐る恐る開くと、自分が持っていた鍵が長く伸び、

魔物の身体を突き刺していた。

「ぐ……っあが……っ……」

魔物は、身体がみるみる溶けていく。

これは昨日、比上がやった光景と同じだ。

「ゴン…な…おでは…もつど…もつと…うえにいぐ…んだあ……」
魔物は、地面を黒く焦がし消えていった。それと同時に、ぐちゃぐちゃになった中川も、地面に吸い取られるようにして消えていった。

「な、中川先生は…」

「死んだ。正確に言うと、神に回収された。今度は中川自身が魔物にならないようにな」

伸びた二人の鍵は、闘いが終わると自然に小さく戻った。

「魔物に乗っ取られた人間は、こうやって殺すしかない。キーパーソンが殺すことにより、神の元に送られる…」

今まで、何人殺したんだ？とは、恐ろしくなっって聞けなかった。

「魔物に喰われる人間を増やさないためにも、あたしたちキーパーソンは闘い続ける…」

お前は、どうする？

比上の目が、そう聞く。

俺は…

「俺も…闘うよ」

闘いの幕は、切って落とされた。

同類？

小さい頃から無口で無愛想だった日向は、親戚からもあまり好かれてはいなかった。

少しは笑ってみろ。

馬鹿なんじゃないか？

医者に見せてみる。

好き勝手な暴言が彼に向けられ、それは学校でも同じだった。

日向自身も、どうして自分が周りと同じように感情表現できないのか分からなかった。あの子のようにいつも笑顔でいたら、あいつみたいに面白いことが言えたら、周りはこんなにも自分を非難しないのだろうか。

お前は、人より少しだけ正直なだけだよ。

だから、父親にこう言われた時、胸にいつも刺さっていた刺が、やっと取れた気がした。

周りがどんなに自分を否定しても、両親だけは自分を認めてくれた。日向の、唯一の味方であり、安心できる寄り処。

けれど、その安全地帯は、ある日突然、両親の自らの手によって奪われてしまった。

図画の時間だった。担任が慌てて図工室に現れ、半ば強引に日向を教室から連れ出した。

あの日

「私の宝物」という課題で描いていた家族の絵には、今も色がついていないままだ。

「日向っ！もう帰るんか？」

校内で呼び止められるなんて滅多にないことだから、降りていた階段を踏み外しそうになった。

「部活は？」棒アイスを加えた比上が、顔を出す。

「帰宅部だから」

「はあ…部活やってないなんてつまない奴だな」

あんなことがあった後だからか、比上と目が合わせられなかったし「闘う」なんて単語を口にした自分に、正直なところ戸惑っている。

「お前は、部活やってんの？」

「まさかっ！あんなつまないもんやるかよ」

言ってることが矛盾だらけだ。

「じゃ、バイトだから」

なんてクールを装っているが、本当は聞きたいことが山ほどあるんだ。けれど、どう言えばいいか分からない。

「まあバイトは休んで、どっか行こうや。ほら」

だから、比上が自分の腕を掴んで、歩き出してくれたことには感謝している。

「サンキュー」

だが、まさか自分が彼女の分までおごるはめになるとは予想してなかった。

しかも、ハンバーガー十五個にポテト二つ。見ただけで吐き気がした。

「一つ食べてもいいよ」

「一つかよっ！」

「…キーパーソンって、お前の他にもいるの？」

「いるよ。世界中に散らばってる。でも、日本が特に多いかな」

日向がハンバーガーの包みを開けている間に、比上はすでに二つをたいてらげていた。

「よく食うな…」

「対戦すると、腹が減る」

あんな光景を目の当たりにして、よく物が食えるなと思う。

「日本人は、自分の思いや考えを口にしない。いつも本音を隠して作り笑いを浮かべてる…そうすると…」

ハンバーガーがまた一つ消える。

「心に闇ができる。表に出さない…もう一人の自分ってとこ。魔物は、そういう奴を見つけるのが得意だ」

「そんなの、ほとんどの人間がそうじゃないか。みんな世間体を気にしながら生きてる」

だから、少しでも枠から外れた奴を笑い者にする。

「そう。つまり魔物は、乗っ取り放題ってわけ。人間は弱い…甘い言葉と誘惑に、すぐ騙される」

「中川も、その一人だったわけか…」

「魔物が最期に言った、上にいく、って言葉は、もしかしたら中川の奴の気持ちだったのかもしれないな…」

比上はそう呟くと、今度はポテトに手を伸ばした。

「中川は、どうなんの？家族とかには説明するわけ？」

「いや、あのまま。まあ親類がいれば、搜索願いくらいは出されるんじゃない？でも、足取りも分からなければ死体も見つからないんだ、せいぜい失踪者リストに乗るくらいだろうな」

「そんなっ！」

最期を知っている奴が、ここにいるのに…。

「毎年10万人を超える失踪者が出る。その中には、魔物に乗っ取られ、キーパーソンに殺されたケースもあるだろう…でも」

ざわついた店内だったが、日向にははっきり聞こえた。

「お前、そんな事が現実にあると信じるか？」

比上の冷静な口調が、口を付けられないでいる日向のハンバーガーを冷ましているようだった。

「日向みたいに、目の当たりにして初めて信じる。なのに、見てな

い一般人が理解できるわけないだろ」

見た自分でさえ、まだ半信半疑の状態だ。

「まあ何にせよ、あんたとあたしは同類。仲間ってわけだ…よろしく！」

そんな笑顔で言われても…。

「ね、それ食べないならちようだい」

「…え?!」

日向は、目の前にあった十四個のハンバーガーが、綺麗に無くなっていることにやっと気がついた。

怪物だ。

存在？

日向は、バイトを二つ掛け持ちしている。カラオケ、居酒屋、そこに学業がプラスされると、身体は疲れるを通り越して放心状態になる。

「じーちゃん、シンッ！」

そんな日向だが、月に一度、どんなに疲れても行くところがある。

「おお、久信！よう来たな」

何度自分の名を名乗っても、どうしても父親の名になつてしまふ、ボケてしまった祖父の家だ。

「具合どう？」

「お前、学校は？」

「日曜。休みだよ」

祖父の久志は、そうかそうかと呟いて、日向の頭を撫でる。

「友達はできたか？お前は内弁慶だから、なかなかできないだろ？」

「まあね」苦笑いする。

「でも、みーちゃんがいるからこの家も安泰だ。あの子ほど、出来た娘はいないよ」

みーちゃん、三咲。母親だ。父と母は幼なじみで、両方の親もいつか二人に結婚してもらいたいと願っていた。

「だから久信！しっかりみーちゃんのこと捕まえとくんぞっ！」
「分かってるよ」

祖父といると、自分の知らない父親に会える気がして嬉しくなる。聞きたいことが沢山あった。やりたいことも沢山あった。父親と過ごした時間は確かにあったけれど、何一つ覚えてないのは何故だろう。

あの日、自分を置いて逝った両親の死に顔さえ、日向には記憶がなかった。

「元氣そうで安心したよ。じーちゃん、なんか欲しいものある？」

思えば、祖父に痴呆が始まったのも、日向の両親が亡くなって間もなくだった。

祖父の中で、両親はまだ生きているのだ。

「欲しいもの？小遣いを貰っている身分で、お前も随分、生意気なことを言うなあ」

痴呆は進む一方だが、こうして祖父が笑っていてくれさえいれば、日向はそれだけでよかった。

「そうだな、久信。じゃ、満点のテストを持ってこい」

例え、祖父が自分の存在を認知していなくても。

「あら？シンちゃん、来てたの？」

突然、背後からした声に、日向の表情は固くなった。

「偉いよね。毎月必ず様子見に来るなんてさあ。うちの親なんか、三ヶ月に一回も来てないわよ」

現れたのは、父方の従兄弟の朝倉サエだった。同い年で、正月には顔を合わせていたが、いつも強気な態度のサエが、日向は苦手だった。

「久しぶりね。元気してる？」

「ああ……」

「…相変わらず、暗い顔してるのね。不幸が移りそう」

いつもこうだ。サエは、人が傷つくことなんてお構いなし。彼女の口は、毒舌しか吐けないようになってきているのだ。

「でも、叔父さんたちが亡くなってから、シンちゃんも苦労してるよね。普通の高校生ならなくてすむさあ」

哀れむ目つきと、笑みを浮かべる口元、彼女の表情に表れる善と悪が同時に見えた。

「あんなことがなければ、今頃、幸せだったに違いないのに……」
黙れ。

サエの手が、ゆっくりと蛇のように日向の顔に纏わり付く。

「…また、慰めてあげるよ」
黙れっ。

感情とは裏腹に、身体は動けなくなる。サエの唇が自分の口に触れても、それを突き飛ばすことすらできなかった。

「久信っ！！何してるんだ！」

隣から聞こえてきた祖父の声で、やっと呪縛がとかれた。

「触んなっ！」

サエの腕を振り払う。

「無理しちゃって。分かるよ、シンちゃんの気持ち」
お前に分かるわけない。

「叔父さんたちもない、おじいちゃんもボケちゃってる、親戚だって赤の他人同然！」

高笑いする声に、鳥肌が立った。

「あなたを認めてくれる人なんて、この世のどこにもいない。その恐怖に、いつも襲われてるんでしょ？」

「消えろっ！」

やっと叫んだ声だった。

「久信、どうしたんだ？」

祖父が慌てて入ってきた。

違う。

俺は、久信じゃない。

シンヤだよ。

日向は、逃げるように祖父の家を飛び出した。
サエの言う通りだった。どんな自分でも認めてくれる両親がいなくなってしまった日から、日向の存在を証明してくれる人は消えた。
他人と上手く付き合えない彼を、無愛想な彼を…

愛してくれる人間は、誰もいない。

祖父を家を飛び出し宛もなく歩いていると、時間はあつという間に夜を迎えた。明日からまた、学校とバイトの往復生活が始まる。そんなことをぼんやりと考え、家の前の道路に差し掛かった時だった。

誰かが、しゃがみ込んでいる。

「大丈夫ですか？」

「…はい、少し気分が悪くなつて…」

細い腕を掴み、ゆっくり身体を持ち上げる。青白い顔をした女性だった。

「あの、誰かに迎えに来てもらつたらどうですか？」

「いえ…一人で、帰れます。ちょっと昔のことを考えてたんです」
女性は優しい笑みを見せたが、顔の青白さが、その優しさを半減させていた。

「…恋人が、ここで事故にあつたんです。飲酒運転の車に跳ねられて…」

言葉が浮かばず、日向はとっさに俯いてしまった。

「呆気ないですよ、死つて…こんなに突然、無情に訪れるんだから…」

本当そうだ。まるで、神様がダーツでもして、たまたま投げた矢が刺さった人間を殺しているみたいだ。

「私…本当…なんで…」

力が抜けたようにまたしゃがみ込む女性に、手を掛けることさえできない。

何で、死んでしまったんだ。

頭の中で、その疑問ばかり揺らいでいる。

「うつ…ぐつ…ええ」

しかし次の瞬間、日向は後退りした。

女性の背中がパツクリと割れ、また液体が流れ出す。

解放されたっ。

少年？

大切な人がいなくなるということは、身体が半分削られる感じがする。立ち上がることも、手を繋ぐことも、見ることも聞くことも困難になり、生きる意味を失う。

そう考えると、自ら命を絶つという行為は殺人と一緒に。周りにどれほど影響を与えるか考えもせず、勝手に人生を終わらす。

残された人達は、それでも生きていかなければならないのに。

解放された魔物は、前に見たものとは違い、体型が日向より一回り大きかった。

思わず、後退りしてしまう。

「ぎひえヒエヒエッ！久しブリの空気ダ」

それに加えて、饒舌だ。

「人間ノ身体ハ、居心地が悪イッ！特に、女は最悪ダ」

「…何で、そんなに喋れるんだよ…」

「ン？そりゃ、オイラが他ノ魔物ヨリ、優れテルからサ」

みな同じではないのか？

また、日向の中に？が溜まる。

「お前、マダ新人だナア…臭いデ分かる」

臭い？

「場数ヲ踏んでナイキーパーソンは、マダ臭いがしないンダ」

魔物は、ニヤリと口元を上げる。

「魔物臭くナイ」

頭から冷水を浴びたように、身体が一瞬で冷えた。

「魔物ノ血はドクトクの臭いがする。ケモノが腐ツタようナ…」
いつも感じていた悪臭だ。

とにかく、早く倒さなければ…。

「解錠っ！」

鍵を握りしめ、叫んだ日向だったが、鍵は赤の他人のように無反応だった。

「ハア？ ツヒエヒエツ！ 何だよナンダヨ！ お前、ソレでもキーパーソンか？」

そんなはずない。

何度も、何度も叫ぶが、鍵は眠ったまま。

冷や汗が、頬を伝う。

「まあイヤ。今度はお前ヲ乗っ取ろう！」
死ぬ。

鍵が無ければ、何もできない。

「どっけえっ！！！」

上空からした声に、魔物も日向も天を見上げる。

降ってきたのは、人間だ。

「唸れっ！ 大地の鍵っ！！！」

上空から突如現れた人間は、持っていた鍵を思い切り地面に叩きつけた。

まるで、悲鳴のような音を立て、地面にひびが入った。

「仲間カッ」

魔物が飛び上がる。

「仲間？ こいつと俺様が？ 笑わせんな」

現れたのは、長髪の髪を一つに縛った少年だった。背丈からすると、年下だろうか。

「こんなフヌケキーパーソンっ！」

少年は吊り上がった冷たい視線を、日向に向ける。

「それよかお前、初段やな…その人間は、二代目か？」少年の鍵が、魔物に向く。

「ソウだ。最初ハ、子供ダッタ…」

「うう、そいつは厄介」

言葉とは裏腹に、少年は笑みを浮かべていた。その顔は、比上が見せていたような、楽しんでいる表情だ。

「フヌケは下がつとれ！邪魔や」

邪魔。

心臓をえぐる単語。

「唸れ、大地の鍵っ！血肉を喰らった愚かな魔物に、天罰をっ！！」
鍵は赤く光り、少年は魔物目掛けて地面を蹴る。その一瞬の動きに、魔物も日向も反応できなかった。

魔物の身体を、少年の鍵が切り裂く。その動きは、十字に切ったようにも見えた。

「地獄で反省文でも書きやがれっ」

砂と化した魔物に、少年は唾を吐いた。

正しいやり方？

上空から突然降ってきた少年は、魔物退治が終わると日向の前に仁王立ちした。

近くで見ると、本当に小さい。150あるだろうか。魔物と闘っていた時は、あんなに大きく見えたのに…。

「俺様は、谷上ジョーあんたは日向シンヤッ！」

こちらの自己紹介までしてくれた。

「フヌケキーパーソンって有名やつ！井尻も笑った」

鼻で笑う谷上だが、背丈が小さいせいか、どうにも生意気な事を言っている小学生にしか見えない。

「あの、歳いくつ？」

「17。タメヤ」

次の言葉が出てこない日向を見て、谷上は睨みを効かせた。

「どーせ、見えへん思ってるんやろ！ばか正直に顔に出しすぎやつ！」

それはよく言われる。

「そういう性格なんだ。悪気はない」

「当たり前や！これで悪気があったら、フヌケの上に最低や」

よく喋るな。と、冷静な感想が浮かんだ。一番強く感じたのが、自分とは180度違う人間だということ。谷上は、ずばずば他人の中に入り込める奴だ。

「まあええわフヌケ。さっさと比上のところに案内しいや」

「俺、日向なんだけど」

「知つとるわボケッ！ささつと案内せえ、フヌケッ！」

一つ言つと、倍返し。

日向の最も苦手なタイプだった。

人との付き合いが苦手な日向に、友達ができたことはない。いつも盛り上がっている輪から外れ、孤独という片隅に追いやられていた。

淋しいだなんて思ったことはないが、楽しそうに笑うクラスメートを見ていると、光りが当たっていない自分が惨めに思えた。

「日向、面倒な奴連れてきたなあ」

そんなことより、比上が自分の携帯番号を知っていることに驚き、ナイスタイミングで電話が掛かってきたことにも驚いた。

「お前、何で俺の番号知ってんだよ」

「携帯見たから。無用心だぜ、ズボンの後ろポケットに入れとくのは」

さらっと凄いことを言うな。

「それよか、なあんで谷上がここにいんだよ」

比上が睨みを効かせると、先程まで意気がっていた谷上が眼を逸らしていた。

「井尻が、最近の比上は勝手な行動を取りすぎやから、見て来いて…」

「うるせえ、何もしない役立たずが…」

比上が毒舌なことはよく分かっているが、井尻という人のことを口にした時の顔は、いつになく険しかった。

「お前、このままノルマ達成しないと、雇いつける前に、鍵を取り上げられるで！井尻も黙っちゃおらんっ」

「だから？何？あたしにはあたしのやり方があんのっ！あんたらと一緒にしないで」

へらへらしていて、人の揚げ足を取る。そんなイメージの比上が、眉間に皺を寄せて怒鳴る姿は、日向には意外だった。

「井尻は認めへんで。いつか制裁にくる」

「上等。きやがれっ」

谷上も、諦めた様子だ。

「気変わったら連絡くれ」

「とつとと消えろっ」

何か言おうとした谷上を気にもせず、比上は背を向け去って行った。

「なんか…複雑？」

「ああ…比上はキーパーソンの中でも郡を抜いて力がある。鍵屋もソコは認めとる」

「鍵屋？」

「俺らキーパーソンを取り仕切つとる、本部みたいなとこや」
谷上が自分の鍵を見つめる。

「俺も、あいつには何度も助けられた…せやけど、あいつは他人と交わらん。鍵屋の上層部にも盾突いて、勝手な行動しよる」
じつと、日向を見た。

「あんたを勝手に解錠させたようにな」

前の戦闘で、解錠できなかった自分が蘇る。

「けど、さっきはできなかった」

悔しさなのだろうか。口の中が、物凄く苦くなった。

「当たり前や。本来、キーパーソンになるのには順序がある。比上はそれぶつ飛ばして、お前を解錠させたんや…波があるのは、正しいやり方を教わつとらんから」

正しいやり方。

道を踏み外さないよう、なるべく目立たなく生きてきた日向にとつて、自分が間違ったやり方でこういう運命になってしまったのは、納得できなかった。

「正しいやり方、知ってるの？」

「…鍵屋に行けば、師範がある」

キーパーソンになると決めたが、また今回のように死にかけるのは御免だ。

「なあ！俺をそこへ連れていってくれっ！」

鍵屋？

そこは、鉄筋コンクリートで出来た、普通のマンションだった。谷上が言うには、こういうどこにでもある建物の方が、みんな見過ごすから使いやすいんだそうだ。

確かに、この住宅地にわけの分らない魔物と闘う連中がいるなんて、誰も思わないだろう。

マンションに入るとすぐに、エレベーターに乗る。谷上が押した階が、地下13階だったことに眼を疑った。

「俺の側から離れるなよ」

扉が開く前に、谷上は念を押す。

ありきたりな効果音が鳴ると、エレベーターの扉は素早く開いた。「谷上、戻りました」

そこに広がる世界は、まさに異世界。大小の画面が壁に敷き詰められ、世界各国の映像が流れている。みんなヘッドフォンを付け、何やら呟いていた。

異様な光景だ。

まるで、同じ動きしかできないロボットみたいだ。

「ここが…」

「鍵屋や」

谷上は、首から掛けていた鍵を、エレベーターの横にある鍵穴に差し込む。

ヤガミ エントリー

鍵穴の上に表示された。

「キーパーソンは、鍵屋から指令を受けて魔物退治に向かう。魔物に関する世界各国からの情報が、ここに集まっとるんや」

「すごい…」

ありきたりだが、それしか出てこない。

「お帰り、ジヨ―」

近づいてきたのは、長い黒髪の女性。すっきりとした顔立ちは、無駄なものが一切なく

「美しい」という言葉がぴったりだった。

「そちらは？」

「ああ、日向シンヤや。比上が覚醒させたキーパーソン」

「…へえ…はじめまして。未弘サユリよ」

「日向シンヤです。はじめまして」

握手した瞬間、彼女の冷たい手に身震いした。

「…井尻さんがお呼びよ」

「分かっとする」

谷上が歩き出す。

日向も、慌てて追い掛けた。

「ねえ日向君…」

「…はい」

未弘の鋭い目に、少し構える日向が映る。

「比上は元気？」

返答に困ったのは、彼女から微量だが殺気を感じたからだ。

「…はい」

それだけ言つて、すぐに背を向けた。

いつまでも、未弘という女が自分を見ているような気がした。

「あの人は？」

「比上と同期。頭がキレる、キーパーソンや」

確かに、知能は高そうだ。

「せやけど、比上とは昔から馬が合わん。今も、勝手に動くあいつに未弘は怒りを感じとる」

それなのに、元気がどうかは気になるのか…。

「キーパーソンは、癖がある奴が多い。それに、仲良しこよしじゃ務まらないからな」

続けて谷上が言う。

「時には、仲間を犠牲にすることもあるんや」

「凄い世界だね」

「そうや。お前がおるのは戦場や」

後には戻れない。

「ここや」

長い廊下を歩くと、真っ黒な扉にぶつかる。見ただけで、日向は開けるのを躊躇した。

「井尻って…どんな人？」

「めちやくちゃええ人やで。今は現役退いてるけど、昔はえらい強かったって噂や。まあ少し強引なところもあるけどな」

谷上が扉を開ける。

どんな世界がそこに広がってても、後戻りはできない。

…イルミネーション？

「いらっしやーい!!」

身構えていた日向のかちかちの身体に、大男が飛び付いてきた。

誰!?

「谷上、ただ今戻りました」

「おかえりい谷上! 淋しかったよお。こわーい比上君には会えたかい?」

苦しい…。

首が完全に絞まってる。

「はい…けど、あかんかったです。聞く耳持たず」

「だろうねえ。聞く耳を持つてる奴は、軽率な行動は取らないからねえ」

ギブアップ!!

助けてえ!!

「一つええですか?」

「何なにい？」

「そいつ、泡噴いてはりますよ」
「やっつと、呪縛から解放された。」

「いや、悪かったねえ。若い男子を見ると興奮しちゃって」
言葉と上目使いに、背筋がぞつとした。

「井尻ケンゴ。ここを取り仕切っているボスだ」

長身で美男子。白髪がこんなに似合ってる男性を見たことがない。

「日向シンヤです」

握手をした手は、さっきとは逆で、とても温かい。

「日向君。君のことは以前から知ってたよ…ところでこの部屋どうう？」

え？

「明るくて…素敵な部屋だと思います」

「…ん。素晴らしい！模範解答お」

ほつと胸を撫で下ろす。

「人を傷つけない言い回しを心得てるねえ。もしくは…人に嫌われないように言葉には慎重になってる…」

占い師？

「けど本音は違う。ちかちか光るイルミネーションの多さに、目が痛くなるって思ってる」

言い当てられて、言葉が続かなかった。そんな日向を、谷上も心配そうに見つめる。

「どうしてそうなったかは知らないが、気をつけないと…」

井尻が、日向の心臓部を指差す。

「何が自分の本当の気持ちなのか、分からなくなっちゃうよお」
「本当の気持ち…」

「で、比上が彼を覚醒させたんだっけ？」

「そうです。でも、あいつのことやから無理矢理こじ開けたみたいで…こいつに、歪みが生じとるんです」

「なるほど。確かに、無理に解錠させると後が大変だからねえ…そういうことを、比上君に考えていただきたいもんだねえ」

そう言うと、井尻は静かに日向の胸に手を当てる。

体内を流れる血が、騒ぎだした。

「いい鍵を持つてるねえ」

につこりと微笑む井尻に、構えていた身体の力が抜けた。

「失礼…」

日向の首から、鍵を取る。

「いい鍵だ…本当に…」

イルミネーションに照らされる鍵は、妙に光り輝いていた。

「よし。壊してしまおう!」

次の瞬間、井尻は側にあつた青銅の置物で、日向の鍵を粉々にした。

閃光の鍵？

予想外の出来事に直面すると、身体が硬直する。谷上と日向の二人は、動きが止まっていた。

「はい、粉々あ」

この状況を作った本人は、愛らしく愉快に微笑んでいる。

「な、何してるんすかあ！」

谷上も、思わず声を上げる。

「俺の…鍵…」

幕が、ゆっくり降りていく気がした。

しかし、井尻は顔色を変えない。

「二人とも…静かにい」

粉々になった鍵を指差し、二人は粉々になった鍵に注目する。

鍵のパーツ達が、何かに吸い寄せられるように集まってくる。微量

量のかけらも、ゆっくり、静かに。その現象に、眼を疑った。

「誰かに呼ばれてるみたいだろあ？」

井尻の言う通りだった。ばらばらになったパーツ達は、一つの鍵に戻る。

「再生だあ」

「再生？」

「キーパーソンの鍵は、持ち主の力によってその力を発揮する。一度壊されても鍵が自ら再生するのは、持ち主の力が相当強いってことお」

井尻が日向を見てニヤつく。

「強い持ち主の元に帰ろうって鍵が言ってたよお」

その笑いは、何も言えずに俯いている日向を、嘲るようにも見えた。

「つまり君は、相当強いキーパーソンになり得る可能性持ってるってことだあ」

そう言われても、何も嬉しくなかった。谷上を見ても、彼も険しい顔をしたままだ。

「谷上、いい人材を連れて来てくれたねえ。彼のような優秀な人間が、比上のようないい加減な子の元にいるのは危険だあ」

いい加減な子。

「しっかり訓練して、使えるキーパーソンになつてくれたまえ」
差し出された手を、握れなかったのは何故だろう。

いつも、平和な道を選んできた。争いなんて御免だから、自分の考えなんてしまい込んでいた。

なのに…直感が言ってるんだ。

ここに居ては駄目だ。

「どうかしたかい？」

「あの…俺…」

だけど、ここでこの人の手を握り返さなかったら、もっと面倒なことになりそうな気はする。

「邪魔するぜ！！」

日向が喉を詰まらせていると、扉を蹴り飛ばして比上が現れた。

「これはこれはあ…相変わらず、非常識な登場の仕方だねえ…比上君」

「返してもらうよ。あたしのダーリン」

ダーリン？！

日向と谷上が顔を見合わせる。

「君が見つけたらしいじゃないかあ…この原石。磨けばかなり輝く」
井尻が微笑んでも、どうしても日向には、その笑みがうさん臭くて仕方なかった。

あの笑い方は、見たことがある。

「その作り笑いを見ると、虫ずが走る。悪いけど、ここにこいつはやらない。腐らせるわけにはいかないんだよ」

漂う空気は、この空間を一瞬にして凍らせた。

「酷いこと言うねえ…腐らせるう？君といった方が、誤った情報に汚染されるだけだあ…」

目が笑っていない。

「帰るよ、日向」

「…うん」

「帰る？冗談だろ？ていうかあ…」

井尻が自らの鍵を取り出した。

「帰すわけないだろ？」

伸びた鍵は、真つすぐに比上に向く。

「い、井尻さん！！」谷上も立ち上がる。

「谷上、他のキーパーソンに連絡しろ、緊急事態だ」

比上も鍵を構える。

「漆黒に魂を売った裏切り者がここにいるとなっ
しっこく？」

「あんた、本当に腐っちまったんだな…どうした？大魔王にでも誘惑されたのか？」

「君こそ、力に目が眩んだかい？」

「それは…あんただろ？」

比上の鍵が光り出す。

「時の鍵は、空間を破壊するっ！！」

壁、床、天井に大きなひびが入った。

「谷上っ！」

鍵を握ろうとした谷上を、比上が声で止めた。

「あんたは、殺したくない」

その言葉に、嘘偽りはなかった。

「全く…君ほど優秀なキーパーソンを失うのは残念だなあ…でも仕方ない、さようなら」

井尻が静かに鍵を振り下ろすと、突風が発生した。

駄目だ。飛ばされる。

「比上、逃げる」

「えっ？」

「ここはあたしが止めるから、あんたは地上に出ろっ！エレベータまで走るんだっ」

こんな四面楚歌の中で、一人だけ逃げろって？

「行けっ！！」

風が一層強くなる。

「や…だ…」

俺の人生、一回くらい流れに逆らったって…

罰は当たらない！！

「解錠っ！！」

助けたいんだ。

頼むっ！

「すげえ…光りの鍵だっ」

握りしめた日向の鍵から放たれた光りを見て、谷上が言葉を漏らす。

闇を切り裂き、世界に救いをもたらす、天使が創り出した…

閃光の鍵。

選択？

気付けば、俺はあいつの背中ばかり見ていた気がする。

あいつは強い。

初心者でも分かる。

「疲れたか？」

「愚問。当たり前だろっ」

日向が息を切らせて口を開くと、比上は嬉しそうに笑った。

「体力をつけろっ若者っ！あいつらと闘うとなると、こんなもんじやないぞ」

何となく理解した。比上もかなり強かったが、あの井尻というボスが、本気を出していないことは一目瞭然だった。

戦闘中に、一切顔色を変えない。怒りも動揺もない。無表情で鍵を握る彼を、同じ人間とは思えなかった。だから、あの基地の壁を片っ端から破壊し、目を眩ませる手段を選んだ比上の気持ちは分かんなくもない。昨日今日始めたばかりの足手まといキーパーソンを連れて脱出するには、あれが一番いい方法だ。

「漆黑って何？」

とりあえず、その場に座り込んだ。力が入らなかった。

「大魔王を崇拜する連中の集まり。鍵屋の敵」

「比上、そこに入ってるの？」

風に靡く比上の髪。その隙間から見える彼女の瞳に、不覚にも心臓が高鳴った。

「入ってない。けど、鍵屋からも逃亡した。だからあたしは指名手配されてる…」

沈む夕日は、夜を連れて来る。街灯が少ないせいか、暗闇が周りを包んでいくのが分かった。

「大魔王に魂を売った裏切り者だつてな」

「誤解なんだろう？ だったら、違うつて否定しろよっ！ こんな風に逃げてから疑いが晴れないんだろ？」

「そんな簡単なことじゃない。むしろ、あたしが裏切り者にならないと困る連中がいるんだ」

何だよ、それ。

「お前、本当違うんだよな？」

疑ってないって言ったら嘘になる。だから、ここは正直に聞いた。
「信じるも信じないも、あんたの勝手だ。あたしは、信じてくれとは言わない」

「そんな……じゃ、なんで俺を助けてくれたんだよ？ なんで、俺に解錠を覚えてくれたんだよ？」

「あんたの鍵が欲しかったから」

おいおい……

「閃光の鍵は、天使がこの世に落とした唯一、死者を救える鍵だ。欲しがらない奴はいない」

「お前、俺が信じなくてもいいのかよ！ 俺が鍵屋に入ってもいいのかよ！」

この鍵だけが目当ての奴を、どう信じろと？

「その鍵は、あんたにしか従わない。いや、今のところは、あんたにさえ従ってない。あの時、光りが明後日の方向に飛んだのは、そのせいだ」

確かに、必死で解錠した鍵から放たれた光りは、標的を掠るどころか、壁を破壊して終わった。

「信じてくれなくて構わない。ただ、あたしに着いてくると言うのなら、あたしがその鍵の扱い方を教える。それと、これだけは言う……」

風が止んだ。

「井尻にとって、お前を含め他のキーパーソンは、単なる道具にすぎない」

あの、目が笑ってない顔が蘇る。

「キーパーソンとしてこの世界を救いたいのなら、自分で選べ。どちらを選択しても、地獄にはかわりないんだ」

そう言い放たれ、頭をかち割られた気分だった。両親が生きていた頃、俺は随分と臆病で、何をするにも二人の側を離れなかった。そんな、小心者の息子を心配してか、父は口癖のように言っていた言葉…。

どうしたいのか、自分で決めなさい。お前の人生、良いも悪いもお前が選ぶんだ。

比上の言葉で、甦る記憶。いいことを沢山教わったはずなのに、忘れてしまっていたなんて。

「俺が決めなきゃいけないんだもん…」

日向は、携帯を取り出す。

「日向だけど…」

「分かるよっ」

怠そうな比上の声がした。

「決めたよ、俺…」

そっぴや、キーパーソンになるってのも自分で決めたんだ。

何だか、成長してる気がした。

「…信じるよ、比上のこと。お前についてく。どんな面倒に巻き込まれても」

「…厳しいぞ」

低い声がした。

「覚悟してる」

こうやって、少しずつでも自分で歩いて行くんだ。

両親が自殺したあの部屋から、なすすべなく立ち尽くしたままの自分を、早く連れ出すんだ。

選択？（後書き）

一巻終了ってことで！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、^{たんのう}堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5427h/>

CLOSE GATE～扉を鎖す者たち～

2010年10月8日15時20分発行